

Title	貧困問題の歴史的位相(上)
Author(s)	柴田, 武男
Citation	聖学院大学論叢, 第 26 巻第 1 号, 2013.10 : 43-50
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4575
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

貧困問題の歴史的位相(上)

柴田 武男

抄 録

貧困問題を論じる上で河上肇の『貧乏物語』は不可欠の文献であるが、解決策を「道徳論で贅沢を止めよ」としていることで批判を浴びた。しかし、彼の「貧乏線」は現在の貧困問題に繋がる業績でもあった。現在の貧困問題は、絶対的貧困ではないが奨学金返済問題にみられるように、本来若者を支援する制度が逆に将来不安を生じさせるという意味で平成の『貧乏物語』となっている。

キーワード； 河上肇，貧乏物語，大内兵衛，道徳論，奨学金返済問題

1. はじめに…河上肇の『貧乏物語』から

明治，大正，昭和と生き抜いてきた経済学者の河上肇は，1916年9月1日から同年12月26日まで大阪朝日新聞に「貧乏物語」を連載し，翌年の1917年に京都の弘文堂書房から出版され，30版も重ねてベストセラーとなった¹⁾。さらにその翌年の1918年には米騒動が始まり，「貧乏物語」は単に書籍の問題では無く，日本の深刻な現実となっていた。その困窮した日本社会で「貧乏物語」は多くの人に読まれてきたのである。

同書は著書により絶版とされたが，死後遺族の了解を得て岩波文庫に収録され，さらに版を重ね，手元にある文庫の奥付には2011年5月16日第72刷発行とある。現在なお読み継がれている古典的名著である。だれしも古典的名著と評価しながらも，学問的評価は必ずしも高くは無い。同文庫の追記で大内兵衛は「一生をかけてはるかに遠く遠くまでこの問題を追っかけてみた。にもかかわらず彼の登り得た峯の高さは彼が自負するほどには高くなかったようだ。」(同文庫，235頁)という辛辣なものである。さらに，追記に先立つ解題では，「『資本論入門』のピークに立って『貧乏物語』を顧みれば，それはたしかに卑俗にして低調であり，学説として誤謬である。」(同文庫，228頁)とまで断じられている。

ここに典型的な『貧乏物語』の読まれ方が記されている。本書の学問的価値に関する大内兵衛の評価が低い理由は，次のような記述に鮮明に現れている。

『『貧乏物語』の問題提起は、かくして大いに有意義であって、それによって日本思想界の受けたショックは前例を見ないほど大きかったが、その解決策なるものは、それに応じうるほどに徹底的なものでは決してなかった。本書において著者は三つの貧乏根絶の方策を示した。奢侈の廃止と社会政策と社会主義と。そしてこの内で、著者が実際に採用して有効なものとしてあげた方策は、なんと、第一策たる奢侈の廃止だったのである。社会政策も社会主義もこれにあずからなかったのである。いいかえれば、河上博士は、このときはなお純然たるマルサス主義に過ぎなかった。彼は、東洋のマルサスとして道徳的抑制をもって、この世界史的大問題を解きうとしたのである。」(同文庫, 222-223頁)

すでに同時代に、「奢侈の廃止」に解決策を求める河上肇の不徹底さには批判があった。その代表的なもののひとつが、慶大義塾教授であった福田徳三による大阪毎日新聞に1919年に掲載された講演速記「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ(八)」である。長文の掲載であるので、本稿に直接関係する部分を引用する。

「貧乏物語」

河上博士の有名な文学書の貧乏物語にもありますが、「今日余裕のある人々が奢侈、贅沢の為に投じて居る金額は大したものであるそこで仮りに夫等の人々が若し一切の奢侈贅沢を廃したとするなれば是迄そう言う事に労費されていた金は皆浮いて出で夫れが悉く資本になるのである夫れから又そう言う奢侈贅沢品を製造する事業の為に吸収されていた資本も皆浮いて来るようになって来れば幾何ら資本の欠乏を訴えて居る日本でも優に諸般の事業を經營するに足る丈けの資本で出て来る筈である独逸が今度の戦争に容易に屈せなかったのも開戦以来上下挙って一切の奢侈贅沢を中止したからである需要は本で生産は末であるから我々が若し需要さえ中止したならば贅沢品の生産に之に伴って自然に中止せられ其結果必然的に生活必需品が豊になり貧乏も始めて世の中から跡を絶つに至るであろう」と言う人がありますがタトイ河上博士の言の如く贅沢品の生産に費す労力資本全部が社会有用の生産に費さるとしても生産は矢張り足りない、矢張り乏しきを憂えなければならぬと思うのであります。夫れに金持に贅沢を止めよと云っても決して止めるものではない。河上博士の貧乏物語は貧乏人若くは其候補者に読まれたものであって金持にはあまり読まれて居ない書物であります。だから河上君が折角骨を折って説服しようと努めた其苦心も水泡に帰する次第であります。又需要は本で生産は末であるという博士の所論は其前提に於て間違っている。少くとも贅沢品に就ては間違っている居りはしないかと思う。」⁽²⁾

ここで福田徳三は三点の批判を試みている。一つは、贅沢品の生産を止めて生活必需品に振り向けても到底足りないこと。二つには、金持ちに道徳論で贅沢を止めよと言っても無駄なこと。三つ

には、需要があるから生産があるという前提が間違っていると。福田徳三はマルクス主義に批判的であったので、大内兵衛とは異なる立場からの批判であるが、「金持に贅沢を止めよと云っても決して止めるものではない」として道徳論で問題の解決を図る『貧乏物語』に否定的なことはでは共通している。

2. 『貧乏物語』の論じられ方

ここから『貧乏物語』論は、貧乏を論じた書籍との評価より、なぜ河上肇が道徳論に陥ったのかという点の解明に焦点が移った。それを示すのが杉原四郎の論文『『貧乏物語』の想源』⁽³⁾である。ここで杉原四郎は、「しかし本書で河上は、一体何を読者に訴えようとしたのか、河上の本心というか本当のねらいというか、それはどこにあったのか、そして本書は思想家・研究者としての河上にとってどういう意味をもっていたのか、こういう問題についてはまだ論じたりない点があるように思われる。」(257頁)という問題提起をしている。杉原の問題は、「河上は1915年12月に櫛田民蔵にあてた手紙の中で「社会主義の伝道」をあらたにはじめるといふ決意を表現した。」(264頁)にも関わらず、到底社会主義とはいえない「道徳論で贅沢を止めよ」という解決策を『貧乏物語』でなぜ最終的な解決策としたのか、というものである。杉原はこの点について、次のように書いている。

「社会主義が二十世紀の最大の問題であり、これを解決することがわが国にとっても焦眉の急であるという意識をもって帰国した河上は、なればこそ社会主義の伝道を決意し、『大阪朝日新聞』に連載をはじめたのに、その結論は人心改善政策に終わってしまった。しかもその為の何の具体的政策も示さぬままに一のはどうしてなのであろうか。」(267頁)

杉原の何か無念な想いが伝わるような文章である。さらに杉原の結論は痛切な思いで彩られていると言っても過言では無いだろう。

「体制の根本的転換という事態が生ずるためには、経済観、道徳観、人間観の根本的転換がその前提として、またそうした体制の転換を円滑に実現する条件として必要であるという問題意識が当時『貧乏物語』の執筆過程で河上に強まってきたのではなからうか。…中略…河上は制度改造による社会主義実現を見るためには、経済思想がまず個人主義から人道主義への転換が必要である金持や有識者、指導者の意識改造がとくに重要であるが、それも社会一般の経済意識の変革の中ではじめて可能であろうという見通しをもっていたのではないか、彼の人心改造論の背景には、こうした経済思想の史的発展論があったのではないかという『貧乏物語』の読み方を、ここでは一つの仮説として提示するにとどめる。」(268頁)

杉原は、「経済意識の変革」「経済思想の史的発展論」として、河上肇の道徳論的解決手法に理解を示している。そこには大内兵衛のごとき一刀両断の明快さはない。むしろ、大内兵衛の「卑俗にして低調であり、学説として誤謬である。」とまでの酷評から救い出したいとの想いが感じられる。

大内兵衛、杉原四郎の読み方は、河上肇の『貧乏物語』の読まれ方として対照的ではあるが同時に典型的なものであり、それはそれで意味のある議論ではあるが、そもそも河上肇が問題とした「貧乏」とはどういうことか、という問題が軽視されている。大内兵衛に至っては、「いうまでもないことであるが、日本の社会問題はもはや「貧乏物語」ではない。だから『貧乏物語』によってそれを解くことはできない。それだからこそ、『貧乏物語』は著者によってぬぎすてられたわらじなのである。」(岩波文庫、230頁)と河上肇が担った貧乏問題そのものが時代遅れと切り捨てられている。

そうなのだろうか。貧乏問題は過去のものなのか、また、それは俗流マルサス主義的な解決手法に留まるものであったのか。また、杉原四郎が仮説として提示した河上肇理解に積極的意味はないのか、われわれはもう一度河上肇に立ち止まって、『貧乏物語』を過去の物語として読むのでは無く、現代の物語として改めて読まれるべきではないのか。

本稿のタイトルを「貧困問題の歴史的位相」としたのは、そのような問題意識からである。位相とはおもに解析学とか物理学で用いられる用語であるとは承知しているが、ここでは、『世界大百科事典 第2版』の3番目の用語法として示されている「3 地域・性別・年齢・職業・階層や、書く場合と話す場合などによって、言葉の違いが起こる現象」として用いる。貧乏をわれわれは現代風に貧困と呼び変えているが、貧乏あるいは貧困という言葉が時代の変化によってその内容が変化し、また、われわれに突きつけている問題も変質していることを本稿ではまず問題にしたい。

『貧乏物語』は、「いかに多数の人が貧乏しているか(上編)」「何ゆえに多数の人が貧乏しているか(中編)」「いかにして貧乏を根治しうべきか(下編)」の三編からなっている。上編の「いかに多数の人が貧乏しているか」をみると、なぜ貧乏人が多いのかを論じていて、そもそも貧乏とは何か論じられていないような感があるが、そうではない。河上肇は、上編で貧乏とは何かを問うているのである。

3. 『貧乏物語』における貧乏の定義とは

『貧乏物語』への問題関心が、マルクス経済学者を中心にして、なぜ社会主義者河上肇が俗流マルサス主義の道徳論に陥ったのか、その解明に焦点の一つが移ったとはいえ、古典的名著である。『貧乏物語』における貧乏の定義について、詳しい解説があることは上記の杉原論文の注を見ればすぐさま了解できることである。したがって、本稿では河上肇の定義を確認するのに留める。そこでは、貧乏人を三類型にまず分類されている。

「第一の意味の貧乏人は、金持ちに対していうところの貧乏人である。しかしてかくのごとくこれを比較的の意味に用い、金持ちに対して貧乏人という言葉を使うならば、貧富の差が絶対的になくならぬ限り、いかなる時いかなる国にも、一方には必ず富める者があり、他方にはまた必ず貧しき者があるということになる。たとえば久原に比ぶれば渋沢は貧乏人であり、渋沢に比ぶれば河上

は貧乏人であるという類である。しかし私が、欧米諸国にたくさんの貧乏人がいるというのは、かかる意味の貧乏人をさすのではない。」(岩波文庫, 14-15 頁) というものであり、河上肇の軽妙な筆致がベストセラーを納得させるものとなっている。

第二として、「貧乏人ということばはまた英国の pauper すなわち被救恤者という意味に解することもある。かつて阪谷博士は日本社会学院の大会において「貧乏ははたして根絶しうべきや」との講演を試み、これを肯定してその論を結ばれたが、博士のいうところの貧乏人とはただこの被救恤者をさすのであった。(大正五年発行『日本社会学院年報』第三年度号)。私はこれをかりに第二の意味の貧乏人と名づけておく。」(岩波文庫, 15 頁) と挙げている。しかし、河上肇の謂う貧乏人とは第三類型であり、以下のように定義されている。

「実際に当たって貧民の調査などする場合には、便宜のため貧乏の標準を大いに下げて、ただ肉体のことのみを眼中に置き、この肉体の自然的発達を維持するに足るだけの物をかりにわれわれの生存に必要な物と見なし、それだけの物を持たぬ者を貧乏人として行くのであって、それが私のいう第三の意味の貧乏人である。」(岩波文庫, 17 頁)

この定義は生きざりぎりの生活水準であり、絶対的貧困と指摘できるものである。この生きざりぎりの栄養カロリーを収入から確保できる最低ラインを「貧乏線」としている。もちろん、河上肇は人間に食料さえあれば良いという立場では無く、「肉体と知能と靈魂、これら三のものの自然的発達をば維持して行くがため、言い換うれば人々の天分に応じてこれら三のものをばのびるところまでのびさして行くがため、必要なだけの物資を得ておらぬ者があれば、それらの者はすべてこれを貧乏人と称すべきである。」(岩波文庫, 17 頁) と指摘しているが、「知能とか靈魂とかいうものは、すべて無形のもので、からだのように物さして長さを計ったり、衡で目方を量ったりすることのできぬもの」(岩波文庫, 17 頁) として、分析対象から排除している。

このような主観的要素を排して厳密な分析を心掛けている河上肇が、最後に道德という

「物さして長さを計ったり、衡で目方を量ったりすることのできぬもの」を解決手段として持ち出すことに、杉原四郎とともに違和感を感じざるを得ないが、その問題には立ち戻らない。

河上肇が貧乏人の定義として持ち出した「貧乏線」は、現在でいう「貧困ライン」と重なる。「1993年の購買力平価換算で1日あたりの生活費1ドルを貧困ラインと設定し、それ未満で生活している人々を絶対的貧困層(または極貧層)と定義している。」⁽⁴⁾ という世界銀行の定義は、貧乏線と重なり河上肇の先見性を示している。

4. 現代の位相…貧乏から貧困へ

河上肇の貧乏人は「一人の人間の生活に必要な食料の最低費用」しか収入として得られていない絶対的貧困として定義されていることをみてきた。現代において、そうした『貧乏物語』が消滅し

たとはいえないが、河上肇の問題提起がそのまま貧困問題として語られる状況では無い。では、大正の『貧乏物語』から現代を対象を移したときにみえる『貧乏物語』とはなにか。日本弁護士連合会の意見書から考察を始めたい。

「日弁連は、「奨学金制度の充実を求める意見書」を2013年6月20日付けで取りまとめ、同年7月3日に文部科学大臣及び独立行政法人日本学生支援機構理事長宛てに提出いたしました。

本意見書の趣旨

国は、高等教育に対する給付型奨学金制度を速やかに導入し、かつ拡充すべきである。

国は、全ての貸与型奨学金につき、利息及び延滞金の付加をやめるべきである。

国は、全ての貸与型奨学金につき、個人保証の徴求をやめるべきである。

国は、返還期限の猶予、返還免除等、返済困難な者に対する救済制度の拡充を図るべきである。

独立行政法人日本学生支援機構は、返済困難な者を救済するために返還期限の猶予、返還免除等各種制度の柔軟な運用をすべきである。」⁽⁵⁾

奨学金返済問題である。奨学金は勉学の機会均等のためにあるものであり、勉学というと比較的経済的余裕がある生活状況で生ずる問題と理解されて、貧困問題とは馴染まない、現代の『貧乏物語』とはなりえないとするのが一般的認識であろう。しかし、事態は深刻である。

ここには、「奨学金は本来、若者の人生の可能性を広げるためのものであるが、現在の学金返済を巡る問題は、逆に若者の人生にハンディを負わせる結果となっており、さらに、これから奨学金を借りようとする学生にとっても、上記のような問題を目の当たりにして、自分も返せないかもしれないという将来に対する不安となり、奨学金制度を利用することを躊躇し、進学自体を諦める事態をも招いている。」⁽⁶⁾ という深刻な問題意識がある。奨学金が「若者の人生にハンディを負わせる結果」であり、「将来に対する不安」となっているというのは尋常ではない事態である。

具体的には、「現在、大学学部生（昼間）の約50%が何らかの奨学金制度を利用しており、約3人に1人が独立行政法人日本学生支援機構（以下「機構」という。）の奨学金を利用しているが、奨学金制度利用者が増加する一方で、返済金の延滞者の増加も問題となっている。機構のデータによると、機構の貸与型奨学金の2011年度末での延滞額は876億円、延滞者数は33万人にのぼり、3か月以上延滞している者のうち、46%は非正規労働者ないし職のない者であり、年収300万円未満の者が83.4%にもなっている。他方、機構は、増加する延滞者に対し、支払督促申立ての増加、債権回収業者への回収業務委託、信用情報機関への延滞者の登録など、返済金の回収強化を図っている。」⁽⁷⁾ という状況である。

本来、向学心のある若者を支援するための奨学金制度が、逆に、若者の将来不安を駆り立てているという状況こそ、現代の『貧乏物語』であり、貧乏が貧困という呼び名が変わろうとも、生活不

安というキーワードで共通しているのである。

本稿は「貧困問題の歴史的位相(上)」としてある。(上)があれば(下)に続くものである。次稿では、「貧困問題の歴史的位相(下)」として河上肇以前の明治期からの問題を射程に入れて、現代の貧困状況を切り出して平成の『貧乏物語』として提示することを課題としたい。

注

- (1) 2007年8月23日(木)「しんぶん赤旗」に『貧乏物語』を書いた河上肇とは? という記事があり、そこに「19年には30版も重ねていた『貧乏物語』を絶版」という記述があり、それに依拠した。ちなみに、河上肇は「32年9月、53歳で日本共産党に入党」して以来、同党にとって「46年1月30日、党の前進を願いつつ、67歳の生涯を終えた河上に、党中央委員会は「革命の闘士、同志河上肇の死をいたみ、われら一同闘争に邁進する」とその死を深く悼む電報を送りました。」という模範的な共産党員として氏を遇した。

http://www.jcp.or.jp/akahata/aik07/2007-08-23/ftp20070823faq12_01_0.html (2013年7月8日に確認)

- (2) 「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ(一〜八) / 法学博士 福田徳三(講演速記)」(大阪毎日新聞)1919(大正8), 月日不詳。同速記は、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫より転記した。

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=10071577&TYPE=HTML_FILE&POS=1 (2013/07/08 確認)

- (3) 「立命館経済学 44 (3)」立命館大学経済学会, 257-270 頁, 1995 年 8 月号所収。

なお、同論文は http://ritsumeikeizai.koj.jp/koj_pdfs/44303.pdf (2013年7月8日確認) にてインターネットで公開されている。

- (4) 『知恵蔵 2013』インターネット版の室井義雄専修大学教授の解説による。

<http://kotobank.jp/word/%E7%B5%B6%E5%AF%BE%E7%9A%84%E8%B2%A7%E5%9B%B0> (2013/07/08 確認)

ちなみに、現在では可処分所得の中央値の半分を貧困線として用いて、相対的貧困率として論じられることが多い。厚生労働省の「平成 22 年国民生活基礎調査の概況」によると、「平成 21 年の貧困線(等価可処分所得の中央値の半分)は 112 万円(実質値)となっており、「相対的貧困率」(貧困線に満たない世帯員の割合)は 16.0%となっている。また、「子どもの貧困率」(17 歳以下)は 15.7%となっている。」と報告されている。

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/2-7.html> (2013年7月8日確認)

- (5) 日本弁護士連合会の意見書は同会のホームページに公開されている。

http://www.nichibenren.or.jp/library/ja/opinion/report/data/2013/opinion_130620_5.pdf (2013/07/08 確認)

- (6) 同意見書 2 頁から。

- (7) 同意見書 1-2 頁から。

Historic phase of the issue of poverty (Part I)

Takeo SHIBATA

Abstract

“A story of poverty” by Hajime Kawakami was an indispensable paper, but heavily criticized for discussing the issue of poverty through suggesting a solution of “quitting luxury for a theory of morality”. However, his “edge of poverty” was an achievement leading to the issue of current poverty. The issue of current poverty is not one of absolute poverty, but, as seen in the issue of student loan settlements, originally “a story of poverty” of the Heisei which signifies that a system to support youth will adversely cause anxiety in the future.

Key words; Hajime Kawakami, “A story of poverty”, Hyoe Ouchi, a theory of morality, the issue of student loan settlements